



「雨ニモマケズ」の詩は、宮沢賢治が病床で願望を黒い手帳に書き止めたものだが、一度札幌でも展示されたことがある。七夕の日に、いわて花巻空港に近い宮沢賢治記念館で再会した。

6月の雨は、沖縄から最近九州地方に被害をもたらし、沖縄は台風3号でダブルパンチ。雨で地盤が緩んだところに、「風(台風)」が来たからたまらない。「雨ニモ、風ニモマケズ」を超えたレベルで対応に追われている。その後も梅雨前線が長く停滞し、土砂崩れの被害も拡大。実に「雨にも風」にも翻弄されるのが人間なので、自らの力量を知りながら、平時の災害対策を行っておくことが急がれる。

天災のみならず人災も多い。例えば、かの耐震偽装事件。発覚後、事件を糾弾するだけで、政府の被害者への対応は、地震国なのに極めて低周波の微動のまま。北朝鮮のミサイルに対してはあれほど素早い反応だったのに、その差が大きい。また、シンドラーのエレベーター(EV)やパロマの瞬間ガス湯沸かし器のように、あまりに危険が身近な例もある。札幌医大にもS社のEVがあるので試乗してみた。同社の表示は目的階を押すパネルの近くに小さく表示されているだけ。開閉にも問題なく、これまで事故の記録はないようだ。今後はEV作製会社の確認の他、メンテ

ナンスが問題なので、その担当会社も表示して欲しい。自社のEV系列以外のメンテ会社には情報開示をしないのが慣習ということも、今回の事件で明らかとなった。利用者の安全を優先していない姿勢が問題。

こうした現状に立ち、「雨ニモマケズ」をもう一度読み返してみた。人生の教訓なのだが、風雨災害に対しての心構えを示しており、まさに災害コーディネーター(DC)に応用可能なのである。現在DCの定義は災害ボランティアコーディネーターに限定されているが、本来DCは対策本部に関与するメンバーに必須の基本理念と思えてならない。

各種の自然災害に対し、DCはまず「丈夫な身体」、つまり、健康を保っていないと急場に役立たない。また、行動は「自分を勘定に入れ」るわけでなく、急性期は地域住民の避難時の安全確保、慢性期は復興時への対応へ切り替えていく。後者の安定期に避難住民へのサービス調整をするが、「東に、西に」とさまざまな事例があるので小まめに対応。とてもマニュアルとして統一できない、臨機応変(編)ばかりである。一旦、その災害が終息した平時にも、「日照りのとき」「寒さの夏」の災害に備えが要求されている。従って、単に「おろおろ歩き、涙を流す」だけでは用をなさない。一般的には、次期災害への備えは強調されるが、復興期にいたると、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ように、いや積極的に忘れようとして被災住民の関心が急速に低下する。

噴火後6年経過した当地では、避難時、復興時の「みち」の重要性が強調され、NPO法人主催の『火山との強制と地域の「みち」を考える』ワークショップも開催された。平時には物流、観光に活用されるみちも、避難時には道幅を随時広げる工夫、ルートの確保、また、避難時の道路閉鎖と代替道路の検討等必要とされる課題には枚挙にいとまがない。また、防災意識向上と次世代のDCを育てるため「こどもフォーラム」も計画されている。

今年の七夕は雨。晴れたら、「銀河鉄道の夜」を語るに相応しい夜となったが、賢治に縁の町(生まれは花巻市)、盛岡で少し銀河に近づけた。地上は雨でも、「銀河高原ビール」のおかげで「銀河ステーション」のホームに立てた。

ここは、白鳥座のデネブの近く、天の川が二股に分かれるところ。上も下も広大な青い光の世界が広がる。瞬く星がブルーのレースのシルエットに浮かび瞬いている。まさに、賢治記念館の大銀河系図ドームの中に立っているようだ。左手奥にはこぐま座の北極星（ポラリス）、その上方にはおおくま座が見守る。銀河鉄道はこの天の川を沿って南に向かうのだ。こと座のベガ（織姫）が左手、わし座のアルタイル（彦星）が右手に見えてくるはず。宇宙での七夕だ。そして射手座、さそり座を経て、終点は南十字星。

地球は銀河系の小さな星の一つに過ぎない。その上での天変地異は小さい事象だが、その星の住民には、被害をもたらす現実なのだとどこかに冷めた自分もいる。やがて、彼方からチェロに似た荘厳な音が響く。「よく見聞き、よくわかり、そして忘れず」…と。そうだ、災害からの学びや体験はしっかりと受け継いでいかないとならない。

暁の星の中に彷徨う筆者を岩手県立大学での「災害看護ネットワーク」研究会に引き戻すように、盛岡発銀河高原鉄道の甲高い汽笛が鳴った。

## 「山のあなた」雑感

札幌市医師会 大平 整爾  
札幌北クリニック

ドイツの詩人カール・ブッセ(1872-1918年)の“Über den Bergen”を上田 敏が「山のあなた」として日本語訳を付けたのは明治38年(1905)のことであった。彼の訳詩集「海潮音」の中にあり、名訳としてよく知られている。

### Über den Bergen (Karl Busse)

Über den Bergen weit zu wandern  
Sagen die Leute, wohnt das Glück.  
Ach, und ich ging im Schwarme der andern,  
kam mit verweinten Augen zurück.  
Über den Bergen weit weit drüben,  
Sagen die Leute, wohnt das Glück.

### 山のあなた (上田 敏 訳)

山のあなたの空遠く  
「幸」住むと人のいう  
噫、われひとと尋(と)めゆきて  
涙さしくみかえりきぬ  
山のあなたになお遠く  
「幸」住むと人のいう

私がこの訳詩に接したのは中1の頃だった。自慢するほどのことではないが、短い7・5・7・7の名調子でありすぐに暗誦できるようになった。この当時、幸せについて深刻に考えたことはなかったし、漠然と自分は幸せの部類だと感じつつ、「真実の幸せ」とはいま自分が感じているものとは何か違ったものなのかもしれないと感傷的に類推していた。そして、容易には手に入れることのできないものなのだと、感じ取っていたようにいま思い返す。大学の教養課程で原語の詩句に接して、大学講師の言い分に影響されたのが大きいのだが、上田 敏の訳詩が原詩を超えているのだと思い続けてきた。名訳ではあろうが、「原詩を超えた」はドイツ語を幾ばくかしか修めていない身には不遜極まりない感慨であったとこの歳になっての反省である。上田 敏が「人」と訳した言葉に相当する語句を原詩に探すとLeuteとSchwarmeであり、辞典にはいずれも複数の人々の意味とあった。双方を「人」としてしまうことにやや疑問を抱いたのだが、日本語ではどちらも「人」と訳出しないと7・5・7・7の名調子にはなるまいなと思い、また日本語訳の「人」はかなり曖昧な言い回しで、身近な大切なひとなのか・自分には関わりのない不特定多数のひとびとのなかと思いはしたが、それ以上の詮索はしなかった。以下に記すのは、先ごろ見つけた英語訳である。

### Over the mountains,

far to travel, people say,  
Happiness dwells.  
Alas, and I went,  
In the crowd of the others,  
and returned with a tear-stained face.  
Over the mountains,  
far to travel, people say,  
Happiness dwells.

この英訳では「人」はpeopleであり、「ひとと尋めゆきて」は「in the crowd of the others」と訳されていて、あなたの山へ大勢の見知らぬ他人に混じりそれぞれの思いで出向いた状況が伺える（最近の日本語訳には、「ああ、僕も他の人々の群れに混じって出かけたけれど……」と訳されたものもある。）ブッセの真意は、英訳詩でより正確に伝わってくるように思えるのだ。2006年5月23日の毎日新聞夕刊に掲載されたドイツ人・三上カーリンさんのインタビュー記事を読んで驚いた。この女性はピアニストでこの詩に付けられた日独の歌曲を比較し、日独でこの詩が違って受け止められていることに気が付いたというのである。私は聞いたことがないが、ブッセの詩に付された日本の歌曲は感傷的叙情的なそれであったのであろうか。ブッセの原詩にアルバン・ベルグが作曲したものと日本語訳に下総皖一が作曲したものを聞き比べ、ベルグの曲が不安と孤独を感じさせるに対して、下総のそれはどこか幸福感に溢れていると前掲毎日新聞の掲載記事に梅津時比古氏が記している。カーリンさんによると、「山の向こうに理想があるとと言われて、無関係な雑多な人々にくっついて自分も行って見たけれど、何もみつけれず帰ってきた。今は泣き尽くしている」と読めるのであり、ブッセのこの詩は社会批判的な厳しい詩だという。ブッセは挫折・失望を詠いあげたのか、失望のすえにな

お、希望を繋ごうとする意欲なのか、将来にはいい事があるだろうという憧れか、はたまた、幸せはむしろ身近にこそ存在することを暗示しているのか。言葉を正しく解釈するといずれかに辿り着くのであろう。「Schwarme」は、蜂などが飛び回る騒がしい群れというニュアンスだとカーリンさんは言っている。この語感の日英独伊仏など多くの外国語に精通した上田 敏にしても、7・5調には訳し得ないものであったろう。

#### Wilhelm Arent のVergissmeinnicht

Ein Blümchen steht am Strom

Blau wie des Himmels Dom;

Und jede Welle kusst es,

Und jede auch vergisst es.

を上田 敏は次のように訳している。

#### わすれなぐさ

ながれのきしの ひともとは

みそらのいろの みづあさぎ

なみ、ことごとく くちづけし

はた、ことごとく わすれゆく

何とも言いがたい響きのよさとリズムを読み手に感じさせてくれる。上田 敏の優れた日本語の使いようにしみじみ、感じ入るのである。そのように感じながらも、翻訳には超えがたい言葉の壁のあることを実感もするのである。

